



30年の軌跡 ～地震大国日本～

昨年1月1日、北陸地方を襲った最大震度7の能登半島地震発生から丸1年が過ぎました。そして、今日は、30年前に震度7の「阪神・淡路大震災」が発災した日でもあります。年始から春先にかけて、この30年の間に日本で大規模な地震が集中的に起こっていることから、例年、メディアではこの時期に地震の話題が多く取り上げられます。

特に直近の「能登半島地震」においては9月の豪雨の影響も重なり、1年が経った今も避難所生活をしている人が200人以上おられ、被災された人たちの苦悩は計り知れないものがあります。あちこちに倒壊した家屋や、ブルーシートで覆ったまま手つかずになっている家もたくさんあります。道路は舗装の工事が施されたり、仮設道路がつくられたりしていますが、いまだに通行できない箇所がたくさんあります。農業が盛んな地域ですが、田んぼは地震で段差ができていたり、豪雨の影響で土砂や流木が流れ込んだりして、来シーズンの米の作付けは難しい状況です。

14年前の3月11日に発災した「東日本大震災」は、津波の影響も重なり、当時、多くの行方不明者がおられました。10年以上経った今、水道・ガス・電気、道路の復旧はほぼ完了していますが、津波による浸水被害を受けた家屋の再建は、今なお進みにくく、住み慣れた場所を離れて移住をする人がいます。「約3分間の揺れ」がもたらした被害をすべて解決し、以前と同様に安心して生活するためには、気の遠くなるような多くの時間がかかることがわかります。その一方で、昨年、青森・岩手・宮城・福島の本県と東京都が手を組み、「東日本大震災風化防止イベント」を開催し、被災の記憶を忘れることがないように呼びかけています。



30年前に「阪神・淡路大震災」で甚大な被害を受けた神戸市は、現在、「BE KOBE 震災30年を未来につなぐ」のテーマのもと、震災での教訓や知恵を集め、震災を体験した人も体験していない人も、ともに新しいことに挑もうとする勇気や行動を大切にするプロジェクトが展開されています。多くの人が街の復興のために力を尽くしたからこそ、「人はどれほどの困難に出会っても、それでも前を向き、心を合わせて生きていく大きな力を持っている」という確信をもって、次の世代へとつないでいく努力を続けています。

これらの被災後の現状をメディア等で知る中で、「今、私たちにできることは何だろう」と考えている時に、たまたま「漫画読んで能登支援」という情報を見る機会がありました。奥能登出身の高校生が主人公である漫画「スキップとローファー」という特設サイトで第1話を読むと、一人につき、100円が石川県に寄付される、という復興支援プロジェクトです。漫画の内容は、中学卒業を機に奥能登から上京し、東京の学校に通う高校生を主人公に、友人たちとの関わりを通じての成長や心の機微を描くスクールライフコメディで、心の支えになっている家族や友達が暮らす街は、石川県珠洲(すず)市がモデルになっています。この漫画の作者は、実際に祖父母を地震で亡くされ、「全国の人に地震に対する長期的な関心を寄せてほしい」という思いで立ち上げた復興支援プロジェクトです。これは、ほんの一例ですが、被災の地に駆けつけることは難しくても、少しでも復興の力になれる方法は他にもいろいろあると思います。

いずれにしても自分たちの防災意識を高めること、そして被災した中で困っている人への支えの両輪が必要ですね。

保護者のみなさまへ

平素は本校教育にご支援・ご理解を賜り、誠にありがとうございます。いよいよ3学期がスタートしました。何気ない言葉や表情を家族や仲間と交わすことができるという穏やかな日常への感謝を、改めて大切にしたいと思います。「南海トラフ地震」は今後30年間で70%から80%の確率で発生すると予測されています。地震が発生したときにどうするのか、ぜひ、ご家族でしっかりと話し合ってみてください。普段から「自分の生命を守る」という心構えができていれば、突然の災害に対してもあわてずに対応できることがあると思います。

